

# 柳 宗悦の民芸論 (XVIII)

—— 価値の世界 ——

八 田 善 穂

- (1) ものの有ち方
- (2) ものの選び方
- (3) 良い蒐集
- (4) 『日本民藝館』
- (5) 「哲學的至上要求としての實在」
- (6) 「民藝学概論」

昭和7年末、柳<sup>1)</sup>は雑誌『工藝<sup>2)</sup>』に「蒐集に就て<sup>3)</sup>」を発表した。全体は三部から成り、上篇ではものの有ち方について、中篇では有ち物について、下篇では正しい蒐集について、それぞれ扱われている。その内容は柳の独自の価値観を明示するものである。そしてこの価値観は、柳の他の論考の中にも同様に読みとることができる。

本稿はこのことを、「蒐集に就て」の他、『日本民藝館<sup>4)</sup>』「哲學的至上要求としての實在<sup>5)</sup>」、「民藝学概論<sup>6)</sup>」について概観し、そこから柳の美論の一面を明らかにしようとするものである<sup>7)</sup>。

---

注1) 柳宗悦(1889(明治22)-1961(昭和36))。

2) 聚楽社刊。

3) 筑摩書房版全集(以下「全集」と略記する)第16巻「日本民藝館」(以下「第16巻」と略記する)所収。

4) 私版本、日本民藝館、昭和29年刊、全集第16巻所収。

5) 『白樺』第6巻第2号(大正4年2月1日刊)、第3号(3月1日刊)所載、全集第2巻「宗教とその眞理」(以下「第2巻」と略記する)所収。

6) 遺稿、『民藝』(日本民藝協会)平成5年9月号、10月号所載。

7) 柳の著作は旧字体(正字体)、旧かなづかいによっているが、本稿では漢字のみ常用漢字に改めた(著作標題、固有名詞を除く)。

## (1) ものの有り方

「蒐集に就て」の上篇では次のように説かれている。

蒐集はいわば本能的なものであり、知よりも意や情が多く働く。無理をしても買いたい程の熱が起らなければ、蒐集はものにならない。一時は借金をしても、不義理をしても、買いたくなる。

「常識的には愚の骨頂だが、此愚かに達してこそ妙味がある。……平気で愚かな事をするのは、どこか自分を忘れ得るいゝ性質があるからである。……打算的な人間はこんな事をしない。何か夢中になるものを有つてゐるのは、却て人間らしさがあるからとも云へよう。すきまの無い人間にはどこか非人間的な所がある。……無くつたつていゝものに夢中になるのが蒐集の面白い点である。人間に此余裕がなかつたら、生活はさぞ冷たいであらう。<sup>8)</sup>」

物を集めるには金以上に情熱が必要である。情熱があれば、金では見つからないものも集まる。金があつても必ずしも物が買えるわけではない。金では買えない多くのものがある。

「いゝ蒐集には金以上の力が働いてゐる。……蒐集は一つの冒険である。之を非合理的な行爲と称してもよい。併し非合理的な所まで進めばこそ集まるのである。それは合理的な所置より、もつと不思議な働きをする。<sup>9)</sup>」

集める者は、物の中に「他の自分」を見出している。自分と集める物の間には遠く深い因縁がある。蒐集において自分の故郷が見出せる。蒐集はものへの情愛であり、ものへの理解を強める道である。良い蒐集は世界の価値を高めるものである。

しかしここで注意すべきは所有の仕方であり、単なる所有欲に終るべきではない。欲以上のものが現れないと、蒐集の意義は浅くなってしまう。

何かそこに、自分を越えたものが輝くべきである。私欲のみに終るならば、

---

8) 全集第16巻, pp. 527-528.

9) 同書, p. 529.

他人から物を奪うのと同じである。蒐集は他人からも感謝されるようなものでなければならない。正しい蒐集は単なる個人の欲望に終るのではなく、多くの人々に悦びを頒つものである。蒐集は私欲にとらわれてはいけない。蒐集においても人間は立派でなければならない。良い行いが伴うべきである。私有が認められるのは、その個人の所有となること、特別な価値をもたらす場合である。私有することはよいが、それにより、新たな意義が生じなければ私有の理由はない。よい蒐集は私事ではなく、所有を単に私有に止めるべきではない。蒐集が単なる私有物に終れば死蔵であり、堆積、貯蔵に過ぎない。物は活かされず、持主も活かされないことがない<sup>10)</sup>。

「真に物を愛する者は必ずや悦びを人々とも分ちたいであらう。見せない態度より、見せたい態度の方が遙かに自然である。又気持ちとしても明るい。……物への愛は素直でなければならぬ。物は人と人とのよき仲立ちである。心と心とを少しでも器によって逢はせねばならぬ。……蒐集で重要な第一の事は、有ち方である。それによつて物は活かされるか死ぬかである。人も亦それによつて明るくなり又暗くならう。物を有つ上は、間違つた有ち方をしてはならない。<sup>11)</sup>」

## （2）ものの選び方

中篇では蒐集の対象について以下のように説かれる。

蒐集の対象は実にさまざまであるが、集める前にその内容の客観的価値を問う方がよい。それにより他の人々とどれほど悦びを共にし得るか、それがどれだけ自分の生活を深めるかを考えるべきである。

「人間は愚かなものを蒐集してはならない。又愚かに蒐集してもならない。誰も蒐集の自由を有つてはゐるが、何でも蒐集していいわけではない。<sup>12)</sup>」

---

10) 同書, pp. 529-532。

11) 同書, p. 532。

12) 同書, p. 539。

買う力は金銭ではなく、選択でなければならない。選択は理解であり、物は高くても安くても良い。選択力で購われるなら間違いはない。貧しい安い品物でも、選ばれた蒐集は活きている。

「蒐集は見方によつて整理されたものでなければならない。統一が欠ければ内容は稀薄である。結局出鱈目に集めてゐるに過ぎないからである。混乱した選択は蒐集を決してよくしない。質が高まらざれば蒐集には成り難い。集める範囲の広いのはいい。只その間に秩序が有るか無いかゞ肝心である。……見方が確かな時は、品物は様々でも自から統一されて了ふ。筋の通つた蒐集は見応えがある。全体として一個の品物の如き観を示すからである。<sup>13)</sup>

一つや二つの品では蒐集にはならず、集めるとは多くを集めるという意味がある。しかし同時に、多くを集めることが必ずしも良い蒐集とはいえない。

「吾々は数よりも質が遙かに大事なだと云ふ事を忘れてはならない。徒らに量のみ多いのは、良い蒐集ではない。否、良い蒐集にはなれないと云ふ方が早い。質の良いものがそう数多くあるわけがないからである。無闇に集めても、蒐集の内容が高まるわけではない。却て粗悪になる危険が充分にある。数への執着は寧ろ蒐集を悪くする。……数の上に蒐集を置く事は本末の転倒である。集まれば集まる程、質の上にそれを築かねばならぬ<sup>14)</sup>。」

また珍しいものが良いものであるとも限らない。逆に多く作られたものが必ずしも悪いとはいえない。多く作られるために、質が鍛えられることもある。多と美は一致しうる。多いことが即ち醜いとはいえないように、少ないことがそのまま良いともいえない。

「珍らしさはものゝ価値の一つではあつても其本質ではない。珍種の上に其蒐集を築くのは、通常な物の上に立つのよりもつと不十分である。私達は珍らしさにも寡なさにも、こだはらない方がいい。珍らしくとも多くとも、良い物は良いとし悪い物は悪いとして、選択を施すのが正当である。<sup>15)</sup>

---

13) 同書, pp. 541-542.

14) 同書, p. 543.

15) 同書, p. 544.

さらに完全品が常に良いということもない。完全さと質とは必ずしも一致しない。一流品の不完全なもの、二流品の完全なものとは、前者の方が価値が大きい。

傷が気になるのは、美しさよりも完全さを一層求めるからである。傷が大きければ美を損ねるが、完全さがそのまま美しさでは決してない。それは一致する場合もあり、しない場合もある。重要なのは美しいか醜いか、深いか浅いか、正しいか誤っているかであって、完全不完全ではない。完全であっても醜いものは多く、不完全でも美しいものもまた多い。醜くても完全だから選ぶというなら、価値判断からは離れている。良いものは傷があっても良いし、悪いものは完全でも悪い。完全なものだけを集めるのは無理がある。

「完全不完全はものゝ価値標準にはならない。たとへば標準とはなり得ても、根本的な標準には決してならない。<sup>16)</sup>」

それゆえ銘や箱書に価値を置くことも間違いの元である。

「無落款でも良いものはよく、在銘でも悪いものは悪い。否、癖の多い作物は在銘品の方に却て多い。吾々は在銘無銘に滞る事なく、物を直下に観る事が肝要である。<sup>17)</sup>」

### （3）良い蒐集

下篇では正しい蒐集（良い蒐集）のもつべき条件が扱われる。

選び方が間違っていたり、目標が浅かったり不明確であったりすると、良い蒐集にはならない。蒐集は集め方次第であり、物よりも見方が重要である。

まず質への理解が必要である。質とは内容であり、ものの本質的価値である。そして良い蒐集とはよく選択された蒐集のことである。それゆえ価値標準による取捨が重要になる。

「良い蒐集は統一された蒐集である。間違つた蒐集は整理がなく秩序がな

---

16) 同書, p. 546.

17) 同書, p. 547.

い。蒐集は只集める事ではない、整へる事である。従つてそれは価値世界の認識である。それによつてもものゝ価値が確認され整頓されるのである。之に反し雑然とした蒐集は、ものゝ価値を曖昧にし稀薄にする。<sup>18)</sup>

蒐集されるものが美の領域に属するならば、質は美的内容となる。集めるものにどれだけの美しさがあるかについての判断が必要となる。

「良い蒐集は良く選ばれた蒐集を意味する。選ぶとは物を直かに見届ける意味である。直かとは直観に於てとの謂である。裏から云へば概念によらず直下<sup>じきげ</sup>に物の価値を見極める事である。若し直観が鈍るなら、美的価値への認識は忽ち混乱に陥るであらう。結果は玉石が同座するにきまつてゐる。だが良い蒐集にはかゝる過ちがない。直観の働きはものを速やかに統整する。常に焦点が明らかにされてゐるからである。良い蒐集は直観の反映である。<sup>19)</sup>

もし自分に良い見方が備っていないならば、他人の正しい見方に従う方が良い。これにより、定まった価値を守ることができる。しかしこのような「守る蒐集」よりも、さらに進んで「創る蒐集」に至る方がなお価値が大きい。

「蒐集は見方の所産である。物が在つて選ぶと云ふより、選ばれる故に物が在ると云ふ方がいゝ。見方が切り開かれ、基準が高まるなら、蒐集は創作の圏内に入る。之によつて未だ知られなかつた価値世界が、新に追加され増大される。<sup>20)</sup>

こうなればひとつの開拓であり、啓発である。埋もれた真理や美が明るみに出され、隠れていたものが現れ、眠っていたものが目覚まされる。在来の目標が覆えされることすらある。品物の位置に革命が来る。創る蒐集は時代に一步先じるものとなる。先んじればこそ集める必要が起る。そこには絶えざる創造がある。創作的な蒐集は指導力をもち、権威を帯びる。それはときにはものの価値に転倒を迫る。それゆえはじめは一般の理解を受けないこ

---

18) 同書, p. 551.

19) 同書, pp. 552-553.

20) 同書, p. 554.

とがある。在来の惰性が働くからである。

「だが真理は敗れはしない。いつか針の方向は転じて来る。蒐集が創作に入る時、新しい世界が建設される。

かくなれば蒐集は単なる個人的趣味ではない。興味に止るが如きものでもない。既に公な仕事である。蒐集は私有を越えて、普遍的な価値を此世に贈るのである。物があると云ふよりも、蒐集によつて物が創造されると云はねばならぬ。良き蒐集家は第二の作り主である。<sup>21)</sup>

蒐集は生活を明るくすべきものであり、単に遊ぶことであってはならない。それは自己の逸楽に止まってはならず、世界の意味を高めるべきである。それによって生活が活気づき澄み深められるものが良い。蒐集家は常に彼が尊敬を抱きうるものを集めるべきである。

「ここに尊敬と云ふのは、只好きだとか、面白いとか云ふ意味ではない。それは自己を主にした考へに過ぎない。敬念とは自己を謙る意味である。何か自己以上の深さ浄さを物に感じる事である。集める物にかゝる驚きがある時、蒐集は決して死なない。集める行為は、その深さや浄さへの守護であり顕揚である。蒐集は須らく、永遠なるものゝ讚美でなければならぬ。良き蒐集家はものに敬虔である。此敬虔こそその蒐集に光りを与へるのである。物だけでは此光りは現はれてこない。蒐集は物よりも心に多く関係する。<sup>22)</sup>

最後の一言は傾聴に値する。

#### （4）『日本民藝館』

昭和11年、東京・駒場に日本民藝館が開館した。大正15年に『日本民藝美術館設立趣意書<sup>23)</sup>』が発表されて以来、10年余を経てのことであった。設立事情その他については全集第16巻「日本民藝館」所収の多くの論考によって

---

21) 同。

22) 同書, p. 555。

23) 全集第16巻所収。

知ることができる。ここではとくに昭和29年に私版本として発行された『日本民藝館』に依り、上に見た柳の論をさらに追うことにする。

『日本民藝館』は本文164頁にわたり、この種の著述の中では最も整ったものである。内容は、序、一 生ひ立ち、二 民藝館の設立、三 民藝の語義、四 直観的立場、五 価値判断、六 美の標準、七 工芸性、八 蒐集、九 民衆文化、十 茶道、十一 蔵品、十二 陳列、十三 手仕事、十四 宗教と製作、十五 作家と民藝、十六 経済その他の十六節から成る。このうちとくに四、五、六の各節には、次のように説かれている。

直観とは直かにものを見ることであり、見る眼と見られる物との間に、何もものをも介在させないことである。直観は先入観ではなく、あらかじめ見方がある、その後に見るのではない。自分を束縛する一切のものから解放されている境地こそ、直観の世界である。そこで直観は特定の見方ではなく、根本的・本質的な見方といえる。部分を見る働きではなく、全き姿を見る力である。直観によって美しさを見るとき、美しさは価値であり、根本的なもの、本質的なものである。

「要するに「自由なるもの」が姿をとつて現れる時、之を美しい品と呼びなすのであります。ここに自由と申すのは、二相に縛られないもの、そこから解放されたもの、易しく言へば何ものにもこだはらぬものを指します。<sup>24)</sup>」

作為に囚はれたものや、主義に縛られたものはすべて、不自由に落ちたものであり、本当の美しさには達しない。それゆえ自由なものは、何ものにも瀆されない本来清浄の姿とも言える。自然なもの、本然なもの、あらゆる二元から離脱したものを指す。

本当の美しさは、単に醜さに対するものではない。そのような相対的な美しさを価値とは呼ばない。醜に対する美とか、美は醜に非ずとかは、価値世界の事情を語るものではない。美しさに囚われる美、醜さを恐れる美は共に美しさの面目を示さない。美醜以前、美醜未生にのみ、本当の美があるといえる。このような至美は、美にも属せず醜にも属さない。それらの二相の争

---

24) 同書、p. 188。

いから自由にされたものであり、美醜相対する次元の中にはない。理念としての美的価値はこのような特質をもつ。

直観とは価値認識である。価値判断が曖昧であり、あるいは乏しいと、集められるものは玉石混淆となり、統一がなくなってしまう。

民芸館と民俗博物館を比較すると、材料には共通のものが多いが、集め方には大きな違いがある。前者では美的価値に基いて品物が選択されるのに対し、後者では民俗を明らかにする材料たることを重視する。すなわち「品物」としての価値ではなく、それにまつわる「事柄」が重要となる。

一方は物としての美的内容を見、他方は事としての民俗内容を見る。前者は質を、後者は種を求める。一方は価値判断で見、他方は事実判断で見るといえる。

この関係はちょうど倫理学と医学のようなものである。ともに人間を対象とするが、倫理学が「善」という価値判断から人間を扱うのに対し、医学ではすべての人間は等価値である。倫理学の立場は民芸学の立場に等しく、医学は民俗学の立場に近い。

民芸館の蒐集品はすべて価値標準に照らして取捨されたものであり、その選択は唯一の立場による。唯一の立場とは自らのない立場、立場なき立場、本質的立場、特殊ならざる立場を意味する。それは知識的なものではなく、直観的なものである。

自分の立場から「このように見る」というなら、ひとそれぞれに異なる一箇の見方となる。しかし私なき立場、立場なき立場に入り、ものそのものとなって内より見ると、個人の見方には左右されず、万人が見るべき普遍性を示すものとなる。直観的見方はこのような価値的な内容、すなわち権威を帯びることに特色がある。

民芸館では、さまざまな立場からものを選んで雑多に並べてはいない。すべての品は価値判断から整理され統一されている。統一性こそが民芸館の目標であり、その使命は人々に美の標準を贈ることにある<sup>25)</sup>。

---

25) 同書, pp.188-193。

「私共は美が現代に占める意義を重く見たいのであります。もとより道徳も哲学も宗教も、人類に希望と歓喜と平和と自由とを約束するでありませう。併しその魅力は時代の事情に妨げられて、今や弱められて来ました。最も普遍的な宗教も、宗派の争ひからは脱し難く、さなきだに理智の時代は懷疑を醸し、在来の宗教はその勢ひを保つことが困難になつて来ました。この傾きの間に在つて新しい意義を持つものは、美による人類の融和や結合ではないでせうか。さうして美を媒介として理解される新しい道徳や宗教ではないでせうか。美の道徳、美の宗教が建てられたら、文化はその方向をも内容をも更へるでありませう。美を通すことによつて、人類の文化の交流は、ずっと早められ又温められるでありませう。この地上に美の殿堂は建てられねばなりません。その殿堂は、何が人類に幸福を約束するかをはつきりと示唆するでありませう。<sup>26)</sup>」

#### (5) 「哲學的至上要求としての實在」

大正4年、柳は『白樺<sup>27)</sup>』に「哲學的至上要求としての實在<sup>28)</sup>」を発表した。ここで説かれる「實在」は、上に見た「価値」に直結する要素を多く含んでいる。そこで以下、この論考の内容を把握することとする。

柳によれば、真に知るとは真に愛することである。

「知識とは我と物との間に起る理解である。真理は自己を対象中に見出す時にのみ発現される。此知的要求の帰趣は同時に情意の満足せられた状態である。真理に於て主客は合一し融和する。知の悦びは茲に愛の悦びである。<sup>29)</sup>」

「思惟要求の方法は知である。然しその満足は愛である。<sup>30)</sup>」

「理論は実現せられるが為に告げられねばならぬ。真理の存在は遂に切

---

26) 同書, pp. 194-195.

27) 洛陽堂刊。

28) 注5) 参照。

29) 全集第2巻, p. 235.

30) 同書, p. 236.

実な味識であり愛である時のみ可能である。真に知るとは味ふとの意味である。<sup>31)</sup>」

哲学の最後の知識がこのように情意によって満足させられる理知であるならば、このような理知の世界はわれわれに究竟の世界を示す。理知はそこで真そのもの美そのものを体認する。哲学的至上要求としての実在はこのときわれわれの心に閃く。

逆に実在に対する愛着を忘れるなら哲学は不毛となってしまう。

「哲学に現はれた様々の ism（学派）は此実在を如何に見守るかによつて決定せられる。（実在を「我」に限界する者は Solipsism（唯我論）につき、之れを観念に求める者は Idealism（観念論）を迎えてゐる。又物自体（Ding an sich）に事物の客観的自体を是認しようとする者は Realism（実体論）を愛し、万有を只心と観ずる者は Spiritualism（唯心論）を説き、物質を唯一実在と見做す者は Materialism（唯物論）を固守してゐる）。その何れの学派を択ぶにせよ、哲学者の帰る故郷は此実在の故郷である。<sup>32)</sup>」

もし哲学が実在の領域に触れえないなら、いかにそれが論理的に精緻であっても、われわれにとっては無意味である。実在の真相に矛盾するような理論は駆逐されねばならない。

「哲学に起り得べき凡ての辞句、又はその風調は実在の讃歌たるべき使命をおびてゐる。<sup>33)</sup>」

哲学の抽象的な理論は具象的な事実と結合されねばならない。それは理知の対象としての実在を越え、生命の要求としての実在を理解せねばならない。たとえその説明が第三者として始まるにせよ、その終るべきところは第一者としての内生である。理論と内生とは調和の美を示さねばならない。

「知識は味識たることを要求する。知能は既に直観への昇揚を内意する。知は愛を抱かねばならぬ。哲学は理知であると共に恍惚（Illumination）で

---

31) 同。

32) 同書, p. 237.

33) 同書, p. 238.

あり、説明であると共に覚照 (Enlightenment) であらねばならぬ。哲学は人々に福祉を贈るべき使命を帯びてゐる。哲学は「活きんとする意志」を新しく活かさねばならぬ。体感、味識、内生、愛、是等の言葉は哲学者の最後の愛を招いてゐる。<sup>34)</sup>

哲学は實在の法光を理解するものでなければならない。その理論がこの至悦を破るものであるならば、その描く世界は内生しえない虚空の概念に過ぎない。その示す真理は自滅する理知の産物である。

「真理とは直ちに内生であらねばならぬ。實在は生命に実現せられた究竟の世界である。<sup>35)</sup>

實在は厳密に価値の世界に求められる。内心の至上要求に呼応する實在の内容は価値を離れた概念に止まってはならない。名目や比較に止まる一切の知識は、實在の完全な観念たることはできない。實在は最も純一な価値を表示せねばならない。抽象的概念あるいは形態に止まる物体に、不動の實在を求める哲学的努力は、最終的な是認を得るものではない。概念は反省や対比の際に生ずる名目的批判に過ぎない。名目は永遠に名目であり、名辞は實在に付せられた仮相である。ひとは形体ある事物を顧みて、そこに具象性の最も平明な姿を認める。しかしこのような思想は単に思考の未熟さを示すに過ぎない。ひとが形状、素質と見なすものは、思考の反省的所産であり、純粋な具象的価値そのものではない。

「實在とは名状し得る物体ではない。既に吾々の名辞形容をすら許さぬ価値的事実そのものであらねばならぬ。實在は定義される事を嫌ふ。無限の暗示であつてこそ余の要求に堪へ得る實在である。価値は形態ではない。活作である。<sup>36)</sup>

思考の下に展開する世界は差別の世界である。思考は主客の対立を予想する。思考判断においては自己と対象の間に対立関係がある。それはものと心

---

34) 同書, p. 239.

35) 同。

36) 同書, p. 240.

の分離の上に成立する理知であり、その合一に示される内生ではない。価値であり、活作であるべき実在は、対象として止まり得るものではない。われわれの至上要求は対立からの解放を求める。実在は批判的概念、あるいは形態的物質に止まることを排斥する。それは対象ではなく、目的それ自身であり、道程ではなく、帰趣である。手段ではなく、終局であり、相対ではなく、絶対である。名目ではなく、意味であり、存在ではなく、活作である。実在は対比の中にあるのではなく、それ自身において完全究竟の事実である。実在はすべての差別相を消滅させる。哲学的要求としての実在は独立自全の活動であり、自全は自律である。第三者にこれを乱す力はなく、補足する権威もない。実在はそれ自体においてアルファでありオメガである。充全であり、円融である。常に安定し絶対性を保有する。哲学は厳密に実在の観点から、すべての対比的観念を絶滅させなければならない。それゆえ実在を思考あるいは形態の世界に見ようとする哲学的思索は、受け入れることができない。

思考の世界は差別の世界であり、形態の世界は対立の世界である。生命の至上要求としての充全な実在は、一切の対立や区別を絶した第一義のものでなければならない。対立的関係は絶対的至上に到ろうとする努力の間である。差別や分離は矛盾、模索の世界である。生命が最後の平和を得るのは、このような試みの後、主客の争いが終るところでなければならない。実在においてはものと心の差別も融和せねばならない。我といい非我というような態度は実在そのものからは離れている<sup>37)</sup>。

「生命が拡充せらるゝ處は、一切を包含する融合渾一の境である。自我も自然もその対峙を滅して統一ある価値の事実に移らねばならぬ。主観は客観に没し、客観は主観に生きねばならぬ。<sup>38)</sup>」

理知は常に証明を求める。ひとは一切がいずれ理知によって証明されるべきことを期待する。しかし理知はいつか絶滅されるときがくる。そのときひとは一切の思考を棄て、対象に自己を没する。対象は理知によって立証され

37) 同書, p. 241.

38) 同。

るのではなく、理解によって肯定される。それは既に対象ではなく、言語を絶した絶対事実の領域に到る。

「実在は証明によつて示現されるのではない。愛によつて理解せられる究竟の事実である。余は理知の証明が実在の中に於て沈黙せられるのを知つてゐる。<sup>39)</sup>」

自然を理解しようとする者は実在を理解しなければならない。実在の知識は一切の知識の根底である。ひとは実在から分化された種々の現象を語る前に、実在そのものを識らなければならない<sup>40)</sup>。

「認識とは既に物心に横はる温かい関係を内意する。凡ての事物は此認識の圏内に在つて、彼等の内性を披瀝する機会を得てゐるのである。認識の心は凡てを拉して実在に活かさうとする事にある。知覚の方向は必ずその終局に於て実在に向けられてゐる。知覚する者と知覚せられる物との対峙は、共有の至宝たる実在界に彼等を活かす為である。<sup>41)</sup>」

統一は対立を内に含む。実在はつねに主体客体の対立を予件として成立する。

「若し世界が単一性に終るならば世界は無に帰らねばならぬ。若し一切が黒色と云ふ単彩に塗抹せられるなら、茲にいち早くも消滅するのは黒色と云ふ概念そのものである。黒色が色彩としての意味を保有する為には必ず他の色彩との対比を須要とする。黒色は一つの極として、他の極の存在を予想してのみ可能である。<sup>42)</sup>」

すべての観念はその根源を相対律に求められる。同速度で進む二個の物体の間では運動の観念は消滅する。流れる雲も飛ぶ鳥も、何か静止するものに対比されるとき、はじめて飛翔の意味をもつ。光は暗い中で輝き、音は静けさのうちに響く。旋律も高低強弱の中にその美を発する。力学的現象についても同様であり、比重が平均化されるならば重量は事物から失われてしまう。

39) 同書, p. 242.

40) 同書, p. 244.

41) 同書, p. 248.

42) 同。

「対立抵抗は自然をしてその意味を保有せしめる要律である。善美の理想さへも、邪醜の世にのみ栄えるのである。地を否むのは天を否む矛盾である……。若し一切の現象が物質に還元せられるなら、物質は如何にして存在し得るであらう。若し世界が凡て観念であるならば、それが観念たる事を如何にして知り得るであらう。唯物、唯心の各哲学的主張が世界を一面に限る時、彼等は再び起ち得ない破産にその運命を終へたのである。一切を単一に限る世界観は、現象を全然不可解な領土に導いて、明瞭な自然に人為的不明を与へるに過ぎぬ。<sup>43)</sup>」

「心も物もそれ自らに於ては半である。彼等は円融としての実在を示現する為に共に合して一つに遷らねばならぬ。<sup>44)</sup>」

相対の原理は普遍的であり根本的である。天地、東西、上下、左右、遠近、高低等の空間に関する対立、深淺、強弱、美醜、陰陽、明暗、貧富、新旧、遅速、善悪、真偽等質量の差違による対比、因果、始終、受動能動、肯定否定、総合分析、具象抽象、主観客観のような概念的対句、あるいは男女、物心、無機有機、動物植物等、相対的名辞は事象の無数と同様に無数である<sup>45)</sup>。

ひとは世界を時空間に配列し、一切を因果関係の中へおさめようとする。自然科学者は好んで量、質、空間、時間を尺度とする。彼らの探求法は常に因果の原理である。

「然しかゝる思想態度は対象を形而下に限る時にのみ許さる可き事である。人間の理知は一切のものに因を訪ねようと試みてゐる。然し世界観が因果律に服従する時は実に循環の背理を重ねるに過ぎぬ。因果の約束は実在の前に沈黙せねばならぬ。科学は自然を此因果律によつてのみ説かうとする。然しこの原理は神若しくは実在なる事実を自然の圏内から排除しようとする貧弱な思考態度に過ぎぬ。因果律には避け難い終焉がある。それは或約束に立つ限界に過ぎぬ。<sup>46)</sup>」

43) 同書, p. 249.

44) 同。

45) 同書, p. 250.

46) 同書, p. 253.

「人は時空間の存在が宛ら究竟の事実であるが如く見做してゐる。然しこの法則は約束律である以外に何等の權威をも有すべきではない。形而下の事項を対象とする科学者が此原理を彼等の説明に適應するのは至当である。然し形而上の問題に接触する哲学者は何の稚氣を以て彼が画く實在に時空間の約束を認めようとするのであらうか。約束は数的関係である。余は自然を数量によつて理解し去らうとする機械的思想に満足する所以を知らぬ。實在は量ではない、活作である。形態ではない、意味である。彼は既に時空間の定限から永遠の離脱を遂げてゐる。<sup>47)</sup>」

「實在の世界は意味 Sinn, Meaning の世界であり、価値 Wert, Value の世界である。物心の愛を示す相関の世界である。多くの哲学者は實在を物質に求め或は意識に求め又は彼等を超越する彼岸の境に求めてゐる。然し實在は物的又は心的の名によつて呼ばる可きものではない。況んや彼等から隔離された遼遠な域にあるのではない。實在は物心の融合せられた相関の世界にある。<sup>48)</sup>」

實在は自然の意味である。それは物の形によつて表わされたり、心の名によつて代表されるべきものではない。實在は一切の名辞をも許さない究極の自由である。それは時空の約束をも越えて宇宙の一切に飽和し浸透する<sup>49)</sup>。

「自然はその高調に於て既に対象ではない。自然の美は外に見らるゝのではなく内に味はれるのである。美は凡てを融解する。凡ての事物には人の心を容れるべき室房がある。愛とは此房中に自己を見出した喜びである。偉大な芸術は凡て此結合の芸術である。芸術はその至純に於て常に實在の芸術である。哲学も實在の思想に於て凡ての人を一体に結ばねばならぬ。<sup>50)</sup>」

愛の世界は芸術家のみのものではない。物体の落下はニュートンの眼に、永遠の真理を産み得た。科学者が星を仰ぎ、その運行の探求に専念するとき、彼らは星にその心を宿している。

---

47) 同書, pp. 253-254.

48) 同書, p. 254.

49) 同書, pp. 254-255.

50) 同書, p. 260.

「法則とは科学者と自然との間に結ばれた愛の記念である。彼が理知によつて法則を知る時、彼等は法則を味ひつゝあるのである。恐らく科学者とは法則の招きに誘はれる芸術家であらう。芸術家が美の招きによつて自然の懐に入る様に、科学者は法則の愛に招かれて自然の裡に活きるのである。冷かな彼等も既に間隔を絶して対象中に自己を見出してゐる。発見とは対象との合一である。自然と彼等との最後の融合が法則であり真理である。余は科学者もその探求の高調に於て甚だ芸術的であると思ふ。<sup>51)</sup>」

善の觀念も実在を離れては考えられない。道徳は至上事実としての善を肯定しなければならぬ。道徳は個人と個人との結合のうちに起る。個人が他人のうちに活きたるとき、善は最後の祝福を受ける。人との間の愛の帯を破る者は、悪の罪を犯す。分離、隔絶は悲哀であり恥辱である。善は人と人を結ぶ愛の力である。われわれが人を憐むとき、われわれはその人に自己を移している。これは善であり美である。そこには主客の対立は消失し、両者の関係は渾一的実在の状態を示す。

「善は実在に一致する。善はそれ自らに於て絶対である。人はよく善に報酬を求めてゐる。然し善は善に於て一切の価値と意味とを内意するのである。最初にして最後の報酬は善それ自身の裡に内在する。若し茲に報償の念を入れ得るなら、善為とその報償とは同時的である。……善は絶対自全の力である。善行為は実在内生である。<sup>52)</sup>」

実在が顕現するには温く親しい過程を含む。このときの状態をあらわすことばとしてふさわしいものは、抱擁 Embrace, 接触 Contact, 思慕 Eros, 親交 Intimacy, 愛着 Attachment, 情愛 Affection, 和絃 Accord, 結合 Union, 献身 Devotion, 共鳴 Resonance, 応答 Response, 内感 Empathy, 同情 Sympathy などが挙げられよう。

これに対して人間の経験するすべての悲哀はこの結合の破壊に基づく。関係の断絶は自己の破滅であり、人間の罪業は分離から起る悲惨な結果である。

---

51) 同書, p. 261.

52) 同書, p. 262.

反目や争闘は自然の意志に対する愚かな反逆である<sup>53)</sup>。

「人文の擾乱は知と情との反目にある，肉と心との隔離にある，天と地との区分にある，自然と人間との疏遠にある。凡ての噪音は和弦の美を破るからである。自然は愛せよとの教への許に對立の性を得たのである。二つのものは反く為ではない，一つに結ばれる為である。<sup>54)</sup>」

「個性の無辺な拡充に於て，吾れは自然そのものを抱いてゐる。かくて一小自我は宇宙の一切に飽和するのである。宇宙意識 Cosmic consciousness はかゝる時悦ばしくも吾れに照り輝いてくる。吾れは至る処に他の吾れを見出すのである。凡てのものは吾れにとつて同胞である。<sup>55)</sup>」

#### (6) 「民藝学概論」

以上に概観したところから明らかな通り，柳の思想にはいわばその通奏低音として，価値の概念がある。これはこれまで見た限りにおいても，大正初期の「哲学的至上要求としての実在」から昭和29年の『日本民藝館』に至るまで一貫したものである。

また昭和16年に東京帝大人類学教室で行われた講座にもとづく「民藝学と民俗学<sup>56)</sup>」においても，民芸学が価値学であることがくり返し説かれている。

日本民藝協会の機関誌『民藝』の平成5年9月号および10月号には，柳の遺稿（未定稿）「民藝学概論」（仮題，昭和18年執筆，全集未収録）が掲載された。この中でも次のように述べられている。

「民芸学が取り扱ふ題材の帰趨は価値界であります。価値と云ふのは，経済的意味ではなく，哲学的用語に於てゝあつて，この世の最も本質的なものを指す言葉であります。民芸学は価値学の一つであります。……民芸学は

53) 同書，pp. 263-264。

54) 同書，p. 264。

55) 同書，p. 265。

56) 全集第9巻「工藝文化」所収。

かゝる本質的価値を対象とする学問の一つであります。之を価値学と云ひます。普通記述学に対する言葉です。<sup>57)</sup>

「民芸学は価値学である關係上、民芸美を中心問題にします。それ故当然一種の美学と目す可きものであります。在来の美学は造形美を対象とする限り、主として美術を取扱ひました。併し工芸を寧ろ主題にすべきが新しい美学の立場でなければならぬと云ふのが、民芸学の明かにしようとする所です。而も工芸の中で民芸が最も重要視されねばならぬと云ふ見解の上に立つてゐるのです。それで民芸学を民芸美学と呼んでもいゝわけです。<sup>58)</sup>

「美学である限り、広い意味で哲学の部門に属します。材料はどこまでも具体的な器物を取り入れますが、併し趣旨とする所はどこまでも、それ等を通して認められる美の法則であります。法則である限り、広い意味で之を精神的なものと考えていゝでありませう。謂はゞ物の中に宿る心を追求する学問と云つてもいゝのであります。形而下に内在する形而上のことが問題となるのであります。<sup>59)</sup>

「民芸学は美を対象としますが、かゝる美が地上の生活と密接な關係がある限り、地上の行ひたる道德と深い関連を有つに至るのは当然です。美と善との問題は、要するに二個の問題ではなく、表裏いつたい一躰をなすものであります。特に民芸の美は道德的基礎を要求するものです。特に製作の組織、態度、立場は道德性を有たねばなりません。醜悪や繊弱は、道德的風潮の衰頹にもとづく場合が多いのです。善と結合する時、美は愈々確実となるのです。民芸学は道德学と一致すべきものです。<sup>60)</sup>

価値とは、「主観ないしは自己の要求、とくに感情や意思の要求をみたすもの<sup>61)</sup>」、「人間の欲求や関心を満たすもの、望ましいもの、値打ちのあるも

---

57) 『民藝』平成5年9月号, pp.6-7.

58) 同誌, p.9.

59) 同。

60) 同誌, p.10.

61) 平凡社『哲学事典』。

の、ある目的に役立つもの<sup>62)</sup>」であり、状況に応じてさまざまなものが価値をもつ。要求（欲求、関心）自体が一様ではないからである。喉の渇きを癒すには水が最大の価値をもち、空腹を満たすには食物が最大の価値をもつ。

柳の説く価値は、水や食物のような身体的・物質的（即物的）なものではない。また色彩や味の好みのような、個人的なものでもない。これらはたとえ必要ではあっても、そればかりが主張されるのでは全体の秩序は失われてしまう。

これに対して柳の美論の根底をなす価値は、感覚的な要素は強くとも、精神的なものであり、普遍的なものである。柳の論は単に現代の日本にのみ適用すべきものではない。時代を越え、地域を越えるものである。もちろん各時代、各地域にそれぞれの品がある。それらは決して一様ではない。柳の説こうとするところは、それらの多様性を貫く、大きな普遍的価値の重要性であろう。

---

62) 岩波書店『岩波哲学・思想事典』。